

Andrew Beatty,

*Varieties of Javanese Religion: An Anthropological Account.*

Cambridge: Cambridge University Press, 1999, xv+272pp.

いし ざわ たけし  
石 澤 武

はじめに

本書はギアーツ (Clifford Geertz) の *The Religion of Java* (Chicago: University of Chicago Press, 1960) に比肩するジャワの宗教に関する包括的な研究書である。著者の Andrew Beatty は、現在ブルネル大学人文学部講師であり、本書のほかに *Society and Exchange in Nias* (Oxford: Oxford University Press, 1992) の著書がある。

本書の焦点は、ジャワの宗教における「差異とシンクレティズム」(p.1) に置かれている。「私の主要な関心は、ジャワの宗教における多様性の作用にある。イスラームへの篤信、神秘主義、ヒンドゥー教、民衆の伝統が相互に及ぼす影響と、宗教的多様性という現実に対するさまざまな妥協を見ることで、複合的な社会においていかに宗教が作用するか、説得的でダイナミックな説明を与えたいと思う」(p.1)。

著者がフィールドとしたのはジャワ島東端部のバニユワンギである。東ジャワといえばイスラーム伝統主義組織ナフダトゥール・ウラマー (NU) の最大拠点という印象があるが、仔細に見ると、この地域には単に NU の拠点としてだけでは語り尽くせない宗教的多様性が存在している。本書はこの宗教的多様性に正面から取り組み、相互に対立する伝統や

イデオロギーが妥協し折衷していく過程を動的に解き明かしていく。

著者のフィールドワークは1991年12月から93年6月および96年4月から97年4月に行われ、本書の記述は前者の時期の調査に基づいている。この時期は、1990年末にイスラーム知識人協会 (ICMI) がスハルトの肝煎りで結成され、スハルト政権のイスラーム重視姿勢があらわになってきた頃である。

II

本書は9章からなり、以下のような構成をとっている。

序 章

第2章 スラマタン——差異に対する合意——

第3章 聖域

第4章 ジャワ主義的カルト

第5章 実践的イスラーム

第6章 ジャワ主義

第7章 サンカン・パラン——ジャワ主義教団——

第8章 ジャワのヒンドゥー教徒

第9章 結論

序章では方法論とバニユワンギ地方の歴史的概観が述べられる。この地にはブランバンガンというジャワ最後のヒンドゥー王朝が存在し、バニユワンギ地方の住民はオシン人と呼ばれる。16世紀前半、イスラーム化したジャワ北海岸のデマック王国によってマジャパヒト帝国が滅ぼされた後も、バニユワンギ地方では、1768年にオランダの支配が及ぶまで、200年以上にわたってヒンドゥー王朝が存続した。その間、この地方はバリの王権の影響下にあり、今日もバニユワンギはヒンドゥーとイスラームのハイブリッドな性格を保っている地域である。

第2章は、ジャワの共食儀礼スラマタンがテーマである。著者はスラマタンを民衆宗教の中核的な儀礼として位置付け、ジャワの宗教のあらゆる要素が含まれているとする。ここでは、スラマタンに参加する当事者たちはスラマタンに対して全く異なる解釈を持ちながらも、各々の解釈の間に「休戦」が成

立し、スラタタン儀礼の統一性が保たれる様相が描写される。

第3章では、村の守護霊が憑依して演じられるバロンという大衆演劇について論じる。村の守護霊は、魔除けの儀式、予言、病気治しなど、さまざまな実践にかかわる。このバロン劇を通じて、土着の伝統の作用を理解することができる。

第4章では、バニユワンギ近郊のチュンキンにおける聖者信仰を取り上げる。17世紀後半のブランバンガン王タワン・アルンの助言者であったという半伝説的な聖者を祀った廟は、非イスラーム的信仰の避難所となっている。この聖者に対する信仰を通じて、現代のジャワ主義が置かれている苦境と失われた過去を回復しようとするジャワ主義者の試みが描かれる。

第5章では、バニユワンギで行われているイスラームの実践が語られる。この章のテーマの実践的イスラームは教条主義的なものではなく、教義よりも実践と儀礼に重点を置き、非イスラーム的要素を排除しない、一般の農村住民のイスラーム信仰である。ここでは、イスラームの専門的知識を持たない一般のムスリムが、どのようにイスラームをとらえているかが問題とされる。

第6章はジャワの神秘主義がテーマとなっているが、著者はこれを第5章で扱ったイスラームとの対比で問題としている。それゆえ、この章で語られるジャワ神秘主義は、第5章と同じく、理念ではなく農村の信者が行っている実践に光があてられており、イスラームとの関係が論じられる。

第7章は、バニユワンギの農村を拠点とするジャワ神秘主義教団サンカン・パラン（仮称）を取り上げる。ここでも、この教団がどのように農村の一般信者の生活に適合し、他の宗教と関係しているのかが議論の重点が置かれる。

第8章は、1965年の9・30事件以後イスラームからヒンドゥーに改宗した人々について論じている。9・30事件以後、共産党に対する弾圧の中でジャワ主義の宗教的なあいまいさが許容されなくなり、公認の宗教に帰属するよう圧力がかけられた。この過程で、ジャワ神秘主義的傾向を持つ人々はイスラ

ムとの関係を問い直され、ヒンドゥーを選んだ人々も少なくなかった。この章では、政治的激動下でのジャワにおけるヒンドゥーへの改宗の流れと、彼らが農村においてどのようにヒンドゥーを実践しているかが語られる。

### III

それでは、本書の方法的特質を先行研究との対比により見てみよう。

ジャワの宗教研究において最も広範な影響を及ぼした Geertz (1960) は、ジャワ人の社会階層と宗教伝統を3つの理念型に類型化した。周知のように、アバンガン（本質的にはアニミストであって名目的にのみムスリムにすぎない農民層）、サントリ（熱心な正統派ムスリムである都市の商人）、プリヤイ（ヒンドゥー・仏教的な宮廷の伝統を受け継ぐ官僚層）、という区分である。

この3つのカテゴリーについては、ジャワの王宮の伝統を体現するとされたプリヤイの規定に批判が集まり、アバンガンとサントリという、イスラームに対する信仰の強弱を尺度にしたカテゴリーに二分化する見解が、ギアーツの説が広まる当初から存在した。すなわち、ジャワの宗教の基本はイスラームであるとして、ジャワの宗教をイスラームという単一の座標軸に置こうとするものである。イスラームを強調する見解の代表的な論者であるウッドワード (Mark Woodward) は、今まで非イスラーム的と見られてきた神秘主義的要素は、スーフイズムの影響を受けたローカルなイスラームの一形態であるとし、ジャワの宗教体系をイスラームのバリエーションのひとつとしてとらえ直そうとする [Woodward 1989]。

ギアーツの所説とイスラーム重視説からのギアーツ批判に関し、福島真人氏は、ギアーツの3類型はスカルノ体制下において政治的対立が極度に先鋭化した時代の産物であり、その時代的制約を忘れてはならないとし、またイスラームの重要性を強調する議論についても、イスラーム系知識人の政治的・宗教的主張の党派性を隠蔽していると強調している

[福島 2002] が、正当な見解であると思われる。著者の立場は、ジャワの宗教的多様性をギアーツのように社会階層に結び付けて理念型化して説明するのではなく、またイスラームの位置を強調する論者のようにジャワの宗教をイスラームに還元するのではない。シンクレティックな多様性を直視し、この多様性がどのように再生産されるのかを問うところにある。

著者が調査したバニウワングの農村では、汎神論的神秘主義、精霊信仰、正統的イスラーム信仰が同一の社会的空間の中で共存している。それゆえバニウワングは、彼のシンクレティズムに焦点をあてたジャワ宗教研究にとって、格好のフィールドワークの舞台となった。ギアーツがフィールドワークを行ったパレのような、半都市的で根本的に異種的なさまざまな要素が混在する地域と異なり、同一の社会的なコンテクストの中にあるにもかかわらず、宗教的な多様性が見られる点で、バニウワングは著者の意味するシンクレティズムを検討するのに有効な場なのである。

バニウワングで見られるようなシンクレティックな状況は、もちろん歴史的に形成されたものであるが、ジャワのシンクレティズムは単なる過去の結果なのではなく、日々再生産される出来事である。著者が言うシンクレティズムは、さまざまな宗教的諸要素が自らのアイデンティティを失って融合することではない。著者はシンクレティズムを絶えず更新する文化的再生産としてとらえる。シンクレティズムは、調和、競争、流用、土着化といった過程にかかわるのである。この文化的再生産の過程を解釈するにあたり、文化人類学の方法論的伝統において、著者は「個人 - 行為主義と還元的な社会中心主義の中道を行く」と宣言する。社会の不変の構造や諸個人の解釈的パラダイムよりも、著者の関心はいかに観念が生まれ、受け入れられ、力を持つようになるにある。

そして、このシンクレティックな現実がどのような過程で生成されるかを論ずるために、著者が手がかりとするのはスラマタン儀礼である。ギアーツも *The Religion of Java* においてスラマタンを議論

の中心に置いているが、著者によれば、ギアーツはスラマタンについて農民の精霊信仰体系として彼の3類型のうちのアバンガンの部分で論じたため、スラマタンが本当にジャワの宗教体系の中心をなすのかという問題をあいまいにしたという (p.28)。また、スラマタンがイスラームの正統的なテキストに基づいた宮廷由来の儀礼であるとするウッドワードの説に対し、著者はジャワ社会の研究史においてイスラームが不当に過小評価されてきたことを認めつつも、「スラマタンをイスラームの儀礼と見なす人は誰もいない」(p.47) と、ジャワの宗教のイスラームへの還元を否定し、その多様性を主張する。

著者は、スラマタンがジャワの宗教のあらゆる要素を含み、スラマタンを論ずる第2章以下の「この本の残りの部分は、この統一体から各々の要素を取り出したもの」と述べるほど重要な位置を与えている。それゆえ、著者にとっては、スラマタンをギアーツのように農民の精霊信仰の儀礼としてアバンガンのカテゴリーに入れることはできない。著者が解き明かそうとしているのは、スラマタンがいかにして同一の社会的空間の中で「敬虔な商人、アニミストの農民、そして神秘主義者」というギアーツの3類型のすべてが共存することを可能にするかという問題である。「彼らが共有しているものは何なのか？ 彼らが熱烈に保持する差異を不和の勃発から守っているのは何なのか？」(p.30)。ジェームズ・シーゲルは、本書についての書評において、「彼はこのように問題を立てることにより、スラマタンについて魅力的な説明を与えた」と著者の問題設定を評価している [Siegel 2000]。

スラマタンは、個人の通過儀礼や家の新築、事業の開始、紛争の解決の祝いなど、さまざまな機会に行われる共食儀礼である。そこでは主催者が近隣の人を招き、イスラームの宗教的知識のある者が祈りの言葉を唱え、主催者が定型的な挨拶をし、招待客は象徴的な意味がこめられた特別な食物を持ち帰るだけの簡素な儀式である。スラマタンには宗教的志向が同一の人だけが参加するのではない。参加者は主催者の隣人であり、宗教的志向を基準に招待客を選別することはない。招かれた側も、宗教的志向の

違いによって招待を断ったりすることはない。スラマトンへの出席を断ることは重大な非礼であり、近隣での社会的付き合いを極めて困難にする。スラマトンは宗教的に多様な人々が集う場なのである。

そして、スラマトンで唱えられる祈りや挨拶は、どのスラマトンにも共通な、決まりきった定型的なものである。スラマトンへの出席者は、誰もが決まった文句を唱える。しかし、彼らはスラマトンで語られる意味を各人各様に解釈しているのである。

「参加者のあるものは超越的で目に見えない神が人間を創造しコーランをムハンマドにもたらしたと信じている。他の参加者は、いかなる来世の存在も人格神の観念もコーランの真実性も信じない。他の参加者は、（これがおそらく多数を占めるだろうが、その比率はさまざまである）ムスリムの来世でなくカルマの一種と祖先の永続的な存在を信じている。しかし、彼らはみな同じことを語る」（p.34）。

このように、スラマトンの象徴的意味の解釈については何らのコンセンサスも存在しない。

「コンセンサスの代わりに、我々は妥協と暫定的な統合を発見する。それは根本的に異なった方向性を持つ人々の間の一時的な休戦である」（p.25）。こうして、各人の解釈の相違を棚上げする「一時的休戦」によってスラマトンが統一を保ち、スラマトンという儀礼の力によって宗教的多様性のなかでの共存が保証されるのである。

しかしながら著者は、宗教的多様性と言いつつも、本書で描かれるバニユワンギの人々を基本的にはムスリムであると規定している。「イスラームは、単に多くの選択肢のひとつなのではない。それは定数である。現世で苦しみながら生きている人々はイスラームを達成し難く魅力的でない理想と考えており、また、本書の後半で語るように、イスラームを彼岸化しようとする人々もいる。しかし、彼らは皆自分をムスリムと考えている」（p.8）。この意味で、著者が論じるバニユワンギのシンクレティズムも、限りなく希薄な枠組みであれ、イスラームという枠の中に限界付けられている。ヒンドゥーを論ずる最終

章で、著者はスラマトンがヒンドゥー教徒とムスリムを統一させることができるかと問い、その答えは否であると述べている（p.235）。さらに、やや唐突ではあるが、1996年から97年の調査に基づく結論部分では、村でのNU支部結成に伴う宗教的緊張、シトゥボンドでの暴動について触れられており、示唆的である。スハルト体制崩壊後の現在、インドネシア各地で起きているのはそうした事態だからである。

ともあれ著者にとっては、スラマトンこそジャワの宗教の全体を見渡せる戦略的な重点であり、同床異夢の参加者がいかにして同一の社会的文脈を維持していくのか、ここにおいてその動態的過程が観察しうるのである。

ジャワほど宗教的重層性・多様性に富んだ地域はそう多くはないかもしれない。しかし、シンクレティズムをまったく欠いた宗教など現実には存在しない。その意味で、本書はジャワの一地方の事例にとどまらず、シンクレティズムという普遍的な現象の解明に資する研究であると言えよう。

## 文献リスト

### <日本語文献>

福島真人 2002. 『ジャワの宗教と社会——スハルト体制下インドネシアの民族誌的メモワール——』 ひつじ書房.

### <英語文献>

- Geertz, Clifford 1960. *The Religion of Java*. Chicago: University of Chicago Press.
- Siegel, James 2000. "Varieties of Javanese Violence." *Indonesia* 69.
- Woodward, Mark R. 1989. *Islam in Java: Normative Piety and Mysticism in the Sultanate of Yogyakarta*. Tucson: University of Arizona Press.

（東京大学大学院総合文化研究科博士課程修了）